

「聖地」・イサーン

落合

隆・ピンダーラタノ

(バンコック ワットパクナム)

イサーン(タイ東北地方)は乾ききつている。畑には貧弱な野菜が息もたえだえといった様子で生えていて、土の表面は砂浜のような熱を持っている。数センチ掘ってみても水分はまったくない。

ノドが乾く。一日何リットルの水を飲んだらうか。あらゆる命あるものから水分を奪い去ってゆこうとするイサーンの自然は、人間だからといって容赦はしない。水分は汗になる時間も与えられずに体から消え去ってゆく。午後の二

時、三時といった時刻は四十度を超えているはずだ。毎年繰り返されるこの自然の苛酷を、イサーンの村人は生まれた時から、どうにもならない事として受け止める外にないのだろう。

「自然」― 緑豊かな豊饒。季節ごとに咲き乱れる花々。清流を渡る風。これも「自然」の一つの姿ならば、キャベツが大人の握りこぶしほどにしか成らないイサーンの自然も、「自然」のもう一つの姿に変わりはない。

タイ語で「自然」は(thamma-chaat)と発音

され、日本語に直訳すると「仏法が生まれる」となる。

朝の六時、村の中心にある寺院で大太鼓が鳴らされる。しばらくすると村人たちがモチ米（イサーンはモチ米が主食）の入った小さな竹籠とおかずを持って集まってくる。ほとんどが老人と子供たちだが、それでも二十人以上にはなる。

僧侶に食物を施し、食前の読経が始まると用意して来た水筒から器に水を注ぐ。これはクルワット・ナムといわれる儀式であらゆる仏教儀式にはかかせない。経文によって聖化された水



は家の仏壇に上げられるのか、飲料水となるのか、いずれにせよ聖なる水として重要な意味を

持っている。

この乾いた土地、イサーンで人間の命の営みに背を向けているような自然が水の儀式を通して、そのきびしい態度を和らげるならば「水」と「聖」を結び付ける意味あいはいはさらに強まる。

僧侶は集められた竹籠の蓋をすべて開け、にぎり固めたモチ米をおかずに着けて食べるのだが、かなり貧弱な食事だ。僧侶には特に上等な食事を出す事が習慣になっているようだから、村人たちが普段食べている食事の内容が想像できる。野菜はニラの類だけで、あとは大小の川魚を塩焼きにした程度のもの。食後に出された西瓜は生長しきれないのだろう、果肉のほとんどが白い色をしたままになっている。

村人たちは食べ残された料理を再び器にもどし、モチ米の入った竹籠を肩にかけ家路につく。百軒ほどの集落の家々はきわめて簡素な作りになっている。高床式の家は階下に牛や豚を飼い、

柱にぞんざいな感じで板を打ち付けてあるだけだ。熱風と共に入り込む砂埃で床はザラザラしている。特に部屋として仕切っているわけでもない内部にはさして家具らしいものもない。ほとんどプライバシーなどといったものはないのだろう、村全体が大きな家族のようなもので夫婦と子供だけといった家庭はないようだ。

帰るまぎわに訪ねた家は父親が近くの村で仕事になっていて長男は僧侶として十年前に出家、娘の一人は尼さんになっている。誰が畑仕事をするのかと訊ねれば娘婿や近所の人が手伝うと答える。村落共同体としての生活スタイルがあるにせよ出家、得度といった日本などではきわめて特殊な事柄も、この地イサーンでは意味がちがってくる。

確かに生活の状態は貧しく見える。しかし理由はそれだけだろうか。小学校の校庭の脇にある家ではムエ・タイ（タイ式ボクシング）を子

供たちに教えている。枝のような細い足でサンドバックを蹴り上げている姿は逞ましさよりも痛々しさの印象のほうが強い。都会に出て金や名誉をつかむ手段がボクサーになるか僧侶になるか、少女ならば夜の町で働く以外にはないなどとときめ付けたくはないのだが。

牛を連れて来た少年が村はずれにある池の岸に一人で座り遠くを眺めている。この村ではほとんどの家で牛か水牛を飼っている。朝早いうちに外に連れて行き、草を食べさせ夕暮れ時にはもどつて来る。そして村はずれにあるその池で水を飲ませ水浴をさせる。なかば消えかけた陽光の中で牛たちは、その鉛色の巨体を水に沈める。大きな動物のゆっくりとした動作にはこの世の中の秘密を少しだけ明らかにして見せてくれているような印象がある。

子供や女たち。そして少年僧までも水浴びを



しに集まってくる。牛だけではない、ここでは誰の動作もゆっくりしている。この苛酷な自然に逆らうような動作が似合わないことは、牛だけではなくここで暮す誰もが知っている事なのだろう。

牛を曳いて帰ろうとする少年が私のほうに顔を向けた。少し怒っているような、何かが不満であるような表情をしている。こんな事、好きでやっているわけじゃないんだと言いたいのか、ただ単に少年期特有の無愛想な表情を見せているのにすぎないのか。

空中に漂う砂の一粒一粒にイサーンの台地の縁から夕方の陽が及びせられ、風景は一昔前の写真の様なセピア色になっている。

バンコックへ向うバスに乗るために農道を駆けるトラックの座席は激しく揺れている。トラックは乾期の今、水のまったくなくなった川床

から這い上がろうと喘いでいたが、何処からか村人が一人二人と集まり、ついには五人ほどの人々で川床から押し上げた。

農道の向こう側から行列がこちらに来る。太鼓を叩き踊りながら進むその行列の中ほどには、みこし状の台に乗せられた近くの村の老僧が座っている。やせて小柄な老僧の背中はまるくなっているが顔はニコニコと笑っている。トラックが行列と擦れ違う。運転手は顔なじみらしく車を止めて彼らに声をかけ、村人と同じ身振りで踊って見せている。

車は再び走り始める。私は、私の気持の底が何かザラザラしているのを感じていた。

この風土は私にとってそれほど異質なものなのだろうか。いくら水分を補給したところで、このザラザラした印象を押し流すことはできないようにも思える。

イサーンの自然。仏法が生まれる聖地。